

論文掲載と審査者の学歴・研究経歴の相関関係について

光云大学 権赫仁

I. はじめに

論文の掲載は審査者に影響されるものである。したがって、審査者の判定は客観性を担保する責任がある。しかし、現行の韓国の学会では、韓国研究財団の指針に従って築かれた論文審査システムにより、その客観性が維持できているとは言い難い面がある。論文はそれ自体の質も大事であるが、誰が審査するかによって論文掲載の可否が決定すると見える場合も多数ある。果たして、本当に審査者個人の傾向性が論文掲載に影響を及ぼしているかどうかを確認するのが、本研究の目指している目標である。すなわち、審査者がどのような人であるかによって判定が左右される場合があるのか、より具体的には、或る審査者は投稿者をかまわずいつも高い点数を与えているのかどうか、反対に厳しいのかどうか、また、学歴や研究歴などによって点数の傾向性が見られるかどうかを実証していきたい。

そのためには実際行われている審査に関するデータを検討することが必要である。よって、韓国日本語文化学会から提供された5年間の資料（2015～2019年の30～49集）に基づいて検討していく。

II. 審査者の分析

1. 資料の分類基準

まずは、分析対象となる5年間の、審査委員の研究歴と学歴とを基準にしてどのように評価したかを調べる。これは、論文審査に臨む審査委員の経験によって審査の傾向性が見られるかどうかを判断するための作業である。すなわち、留学の有無・研究経歴の長短および卒業校のレベルなどによって、予想できる傾向性が存在するのを確認するための基礎分析である。この基準はあくまでも主観的なものであることを断って置く。

日本学という特性を取り入れて、審査者を韓国人と日本人とに分けた上で、博士学位の有無を基盤にして、①博士号の授与校が日本の大学であるかいないか②その中でも主要大学であるかどうかによって区分してみた。それは留学の経験は遂行する研究の量や接する研究活動の多様性、もしくは指導教官や同僚研究者からの影響力などに差があると判断したからである。

韓国人	学位取得者	日本の大学	主要大学博士		1A	
			その他の大学博士		1B	
	大学院生		主要大学の院生		2A	2
			その他の大学の院生		2B	
	学位取得者	韓国の大学	主要大学博士		3A	
			その他の大学博士		3B	
	大学院生		主要大学の院生		4A	4
			その他の大学の院生		4B	

日本人	学位取得者	日本の大学	日本大学博士	5A
		韓国の大学	韓国大学博士	5B

＜表 1＞学歴分析の基準

本発表の場合、大学院生は審査者として参加できないので、分析の対象にはならないが、今後投稿者との関連性を検討していく中で必要なカテゴリなので、予め分類に入れておいた。そして、ここで主要大学と称する大学の範囲は日本の国立大学と主な私立大学の9校を任意に処理した。韓国の場合も日本学において長い伝統と権威を誇る二つの大学が対象となっている。

さらに、研究経歴の長短については下記の＜表 2＞のように、生年により1950年代から1990年代を区切って分類番号をつけた。

	生年	約号
1950年代	1950～1959	5
1960年代	1960～1964	6-1
	1965～1969	6-2
1970年代	1970～1974	7-1
	1975～1979	7-2
1980年代	1980～1989	8
1990年代	1990～以後	9

＜表 2＞研究経歴分析基準

上記の＜表 2＞で1960年代と1970年代だけを二つのグループに分けた理由は、審査委員の人数が最も集中している年齢だからである。この年齢層は現在学会で運営委員や編集委員として活動したり実務を担当したりしており、分布上多数を占めているグループといえる。

2. 審査者の学歴

韓国日本言語文化学会の場合、投稿論文の審査分野は言語と文化という二つのグループに分けられている。しかし、この二つのグループの中には教育・通訳・翻訳・文学・日本事情といった様々な領域を有するので、社会学的学問を除いて、幅広い日本学をカバーしている。

ここ5年間の審査委員は総計266人にものぼる。もちろん審査委員の中には複数の論文を審査した人も多数いる。分野別には言語が121名、文化が145名である。

	人数 総計 121
7 編以上	29
6 編	4
5 編	8
4 編	11
3 編	13
2 編	23
1 編	33

	人数 総計 145
7 編以上	30
6 編	5
5 編	2
4 編	10
3 編	15
2 編	22
1 編	61

<言語分野の重複審査編数>

<文化分野の重複審査編数>

どちらの分野も50%以上の人数が1～2編の論文審査を担当したことがわかる。これは毎回の審査のために新しい審査委員を招聘していることを物語ってくれる。一方、5編以上の審査に携わっている人的構成をみると、学会の編集委員や役人の割合が高い。したがって、審査の傾向性を分析する際に、この編集委員のグループを最も優先にして集中分析してみる必要がある。彼らの点数の傾向性が複数の審査結果から推定できるかもしれない。

次に、前掲の<表1>における審査委員の学歴分類に基づいて、審査平均点数と審査論文の数を整理してみると次のような結果となる。

学位 論文数	1A	1B	3A	3B	総計
1～2 編	24	11	9	3	47
占有率	51.1%	23.4%	19.1%	6.4%	100.0%
平均点数	38.3	38.1	35.8	41.6	
3～4 編	7	9	6	2	24
占有率	29.2%	37.5%	25.0%	8.3%	100.0%
平均点数	38.8	39.2	41.6	38.3	
5～6 編	9	3	0	1	13
占有率	69.2%	23.1%	0.0%	7.7%	100.0%
平均点数	36.6	41.7	#DIV/0!	44.4	
7 編以上	22	4.0	2	2	30
占有率	73.3%	13.3%	6.7%	6.7%	100.0%
平均点数	39.2	37.8	40.7	40.5	

<表3>言語：学歴分類による分布

* この表において審査者の総数が121名と一致しない理由は、韓国研究者情報から学位授与校が確認できない審査者がいるためである。以下、文化の表4も同様で、かつ研究経歴の生年も同じである。

学位 論文数	1A	1B	3A	3B	総計
1～2 編	38	10	12	11	71
占有率	53.5%	14.1%	16.9%	15.5%	100.0%
平均点数	36.8	37.8	38.2	40.3	
3～4 編	10	5	4	2.0	21
占有率	47.6%	23.8%	19.0%	9.5%	100.0%
平均点数	39.1	39.8	40.1	40.0	
5～6 編	4	2	1	0	7
占有率	57.1%	28.6%	14.3%	0.0%	100.0%
平均点数	34.8	37.9	36.0	#DIV/0!	

7 編以上	22	4	2	2	30
占有率	73.3%	13.3%	6.7%	6.7%	100.0%
平均点数	39.1	40.8	36.0	32.6	

＜表 4＞文化：学歴分類による分布

上記の表 3 と 4 によると、留学の経験がある上で主要大学出身（1 A）によって多くの審査が行われる傾向が強いことが明白である。そして文化分野の 1 ～ 2 編審査を除いては、次が日本留学派（1 B）で、その次が国内の二つの大学（高麗大、韓国外大：3 A）、そして最後に国内その他の大学出身（3 B）の順番となっている。すなわち、論文審査に動員された審査委員は留学派が多数を占めているし、それも主な大学出身による審査が圧倒的に多い。そして、与えた審査点数を見ると、わずかな差ではあるが、1 A グループにおいて点数の厳しさがある程度窺われる。特に文化分野においてその傾向は一目瞭然である。

3. 審査者の研究歴

次は、研究歴による平均点数の分布と論文数の占有率を見てみる。

経歴 論文数	5	6 初	6 後	7 初	7 後	8	総計
1～2 編	3	12	3	6	15	1	40
占有率	7.5%	30.0%	7.5%	15.0%	37.5%	2.5%	100.0%
平均点数	44.00	38.63	39.25	39.38	39.10	49.00	
3～4 編	1	3	0	8	3	0	15
占有率	6.7%	20.0%	0.0%	53.3%	20.0%	0.0%	100.0%
平均点数	35.25	42.77	#DIV/0!	39.13	42.00	#DIV/0!	
5～6 編	0	3	1	1	5	0	10
占有率	0.0%	30.0%	10.0%	10.0%	50.0%	0.0%	100.0%
平均点数	#DIV/0!	38.67	33.17	44.33	38.36	#DIV/0!	
7 編以上	0	2	1	6	4	0	13
占有率	0.0%	15.4%	7.7%	46.2%	30.8%	0.0%	100.0%
平均点数	#DIV/0!	37.48	40.25	37.74	38.01	#DIV/0!	

＜表 5＞言語：研究経歴による分布

経歴 論文数	5	6 卒	6 卒	7 卒	7 卒	8	合計
1～2 編	10	16	17	17	12	5	77
占有率	13.0%	20.8%	22.1%	22.1%	15.6%	6.5%	100.0%
平均点数	41.75	36.53	37.93	36.64	40.28	2.50	
3～4 編	2	4	9	8.00	0	0	23
占有率	8.7%	17.4%	39.1%	34.8%	0.0%	0.0%	100.0%
平均点数	39.50	40.46	40.53	37.71	#DIV/0!	#DIV/0!	
5～6 編	0	0	2	4	1	0	7

占有率	0.0%	0.0%	28.6%	57.1%	14.3%	0.0%	100.0%
平均点数	#DIV/0!	#DIV/0!	32.00	37.85	36.00	#DIV/0!	
7 編以上	1	2	9	10	1	0	23
占有率	4.3%	8.7%	39.1%	43.5%	4.3%	0.0%	100.0%
平均点数	32.57	39.73	37.10	39.08	38.29	#DIV/0!	

<表 6>文化：研究経歴による分布

言語分野では、少しばらつきはあるものの、70年代のグループが審査のメイン層になっている。これに比べて、文化分野では60年代後半と70年代の前半のグループが70%を超える比率で審査に参加している。それから、言語も文化も1～2編を審査する60年代前半の占有率が若干上がる傾向にある。一方、言語分野において7編以上審査した場合、平均点数が少し下がるのが見える。ところが、文化の分野には点数における同じ傾向性は見られない。全体的には言語の方の審査点数が少し高いといえる。

このようなデータから、本学会は韓国研究財団の指針により多様性に基づいて、偏向性を排除しようと膨大な人的構成で審査委員を構成していることがわかる。さらに、

- ① 学会としては論文の審査依頼時に研究経歴より学歴によって依頼が決まる。
- ② 学問分野の性質上、日本留学者の中で優秀な大学出身の権威を認めている。
- ③ そして、この1 Aグループにおいて厳しい点数をつける傾向が若干見られる。
- ④ 単発的に1～2編の審査を依頼する割合が非常に高い。これは各審査委員間の点数の偏差を生じさせる。
- ⑤ 5編以上の複数論文の審査者はほとんど編集委員である。この場合ある程度付与点数の傾向性が読み取れる。
- ⑥ 研究経歴による審査点数の傾向性は見られない。

というふうに整理できると思う。

それでは、次の段取りとして各編集委員別に審査点数を見してみる。付与点数において同質性が保たれているかを確認してみよう。

4. 審査者の傾向性

論文の各審査項目には点数の幅がある。例えば、学問への寄与度を判断する際10点ほどの差がある。優秀な論文であるとしたら、審査委員誰もが10点を与えるという結果はあり得ないので、優秀でも9, 8, 7, 6と点数はばらばらである。それで、総合点数においてはもっと大きな点数の差が生じるわけである。つまり、いい論文という基準に対して40～50点の幅を有する審査委員もいれば、45～50点といった審査委員も存在する。そうすると、実際にはわずかに1点か2点によって、掲載の当落が決定したりするので、結局どの審査委員に論文が振り分けられるかによって全然違う結果になり得るのである。

実際、一例を挙げると、5年間13編の論文を審査したA編集委員の場合、その平均点数は44.4点である。同じ古典文学分野のB編集委員（15編審査）の場合は平均点数が36.6点である。このように点数の甘い審査委員の審査内容を調べてみると、普段審査結果が18～

37点の間にとどまっている投稿者Cの論文に43点を付与した。したがって、投稿者の立場からは唯一の掲載論文となった。同類審査の場合、他の審査者と点数の差が10点以上でなければ、再審査にかけられない規則となっている。よって、一人の審査委員の点数の傾向により論文掲載の結果が左右されるケースが多数あることが確認できた。

Ⅲ. 終わりに

以上、論文審査過程における基礎データを分類することにより、全体的にはある程度の流れはあるが、一人一人の審査委員の点数のつけ方では同質性が確保できていないことが明らかになった。すなわち、一つの論文に対する複数審査者の評価はいつも同一ではないのである。結局このような複数審査者の点数の偏差を防ぐためには、同じ分野の複数の論文を一人の審査者が担当するシステムへと方向を変えて、傾向性の異なる多数の審査者にばらばらと論文審査を任せる現行のシステムを見直すべきである。

それに、細部専攻に分けて、各分野別に論文の掲載率を確保することも重要である。現在韓国のほとんどの学会では、語学と文化といった大きなカテゴリの中で細部専攻の学問的特性を無視して、もっぱら審査委員の付与した点数の順位によって掲載が決まっているのが問題といえる。

今後の課題としては、各審査委員の点数の幅を投稿者と一々照らし合わせてみることに、審査の非一貫性及び審査者の傾向性による点数の隔たりを読み解いていこう。そして、論文審査にかかわってくるシステムの検討や、投稿者がわかからの研究も共同研究として進めていく。